



環境問題はなぜウソがまかり通るのか

武田邦彦著

羊泉社刊

### 出版社/著者からの内容紹介

【錦の御旗と化した「地球にやさしい」環境活動が、往々にして科学的な議論を斥け、人々を欺き、むしろ環境を悪化させている!】 京都議定書ぐらいでは地球温暖化は食い止められない。ダイオキシンはいかにして史上最悪の猛毒に仕立て上げられたか、官製リサイクル運動が隠してきた非効率性と利益誘導の実態とは?

### トーマスの書評

いま環境問題に対して大きな関心が高まっている。今年のノーベル平和賞がアル・ゴア氏とIPCC (Intergovernmental Panel on Climate Change : 気候変動に関する政府間パネル) に贈られたことが象徴的である。

環境を大切にすることは、当然のことであり、誰も反対しないであろう。しかし、環境をビジネスとしてとらえ、それで利権をえている人間が世の中には存在する。そして、彼らの行為は、むしろ環境を悪化させることにつながっている。本書は、環境問題の負の部分を中心にしたものである。その例として、たとえば、ペットボトル問題を取り上げている。

2004年の統計によると、ペットボトルの年間消費量 51 万トンのうち、分別回収量が 24 万トンで、再利用されたのはたったの 3 万トン。残りは焼却されたり産業廃棄物として処分されている。わざわざ分別しているのに、結局ゴミとして捨てる。しかも、お役所と容器包装リサイクル協会は、「焼却」をリサイクルにカウントして、この事実を目立たせないようにしている。

もちろん、リサイクルは大事であるが、実はリサイクルにはコストがかかる。ビジネスとして成立するリサイクルはとくに昔から行われている。くず鉄屋、古着屋、古紙回収しかりである。政府が税金をかけて推進するものではない。